健康ウォッチング

東陽病院内科医師
鈴木健士

介護保険について

横芝町のみなさん、こんにちは。今回は今最も話題になっている介護保険についてお話ししたいと思います。

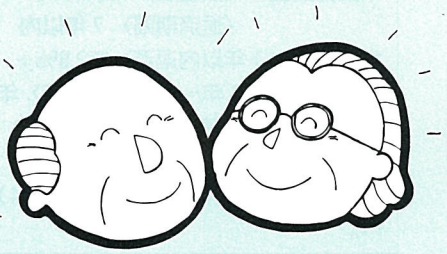
ついに今年の4月から介護保険がスタートしました、この広報の紙面でも介護保険が始まるにあたり、いろいろな説明が掲載されたかと思います、最近も新聞などのマスコミにもいろいろな問題点が載せられているようですが、そもそもこの保険はなぜ生まれたのでしょうか。

日本は障害者などの日常生活に不便のある方への介護、福祉という点では後進国です、北欧諸国などでは障害のある方でも家族に負担をかけることなく生活が保証されているそうです。

日本では今までは家族の方が献身的に(言い方を変えれば犠牲になって)介護するか、ごく限られた一部の人は公的な介護を受けてきました。公的な扶助は個人への負担は少ないですが、悪く言えば「施し」ともとれ、肩身の狭い思いをされている方も多いのではないかとおもわれます。今回導入された介護保険はそれを改善するため、社会全体で保険としての資金を作り、障害のある方が当然の権利として介護を受けてもらおうという考えから生まれたものだと思います。確かに現状ではっきりしない部分もありますが、今までの福祉を強化することは期待できるのではないかと考えています。家族がお年寄りの介護をしている今の状態はすでに限界の状態であると思います。

お年寄りがお年寄りの世話をしている、または独居のお年寄りを近くに住む家族がかろうじて面倒をみている、などという現況は珍しくはなく、それも不可能で施設や病院に入院しているという方もいます。そのため施設はいつも満杯で入所を1年近くまっているというのも日常茶飯事です。病院への社会的入院(帰る所がないという社会的事情で入院している状態)が医療保険を破綻寸前にしています。国民の負担は増すわけですが、現在の高齢化、少子化、核家族化が進む今、家族が犠牲になって介護を一手に支えることは不可能と言っていいと思います。始まった以上は批判ばかりしても得るものはありません。この保険で我々の生活がより良く安心して過ごせるよう制度をよく理解し、活用する努力をすべきだと思います。

東陽病院でも介護型療養病床を設け、貢献したいと考えています。次回ももう少し介護保険のお話をしたいと思います。



文芸

俳句

夕映えの筑波山麓鳥帰る　小林　順子
長谷寺や長き廻廊百千鳥　福田　幸子
鶯の澄みし声音(こうね)の一日(ひとひ)かな　今関　茂生
花粉散る上総下総杉の道　若梅あやめ
御宿や月の砂漠の春うらら　若梅あやめ
春昼や燈台守の下り立ちぬ　玉虫たけし
春潮や虚子碑の背なより望まるる　玉虫たけし
筍飯スープのさめぬ生家まで　戸村　静華
原生林抜けて燈台風光る　戸村　静華
竹の子のそっと月夜を覗きけり　山口　一秋
帰る雁こぼれ一羽の月の影　山口　一秋
選者　山口　一秋

短歌

冬の夜の炬燵に仮寝の心地よく
テレビドラマが遠のきてゆく　吉岡　信子
十センチほどの挿し木の馬酔木なれどあまたの花を踏ん張り咲かす　西山満里子
また降ると思へど竿に広げ干す
取り込みおきし洗濯物を　秋葉　悦子
年毎に賑はひ咲ける木蓮の今年も
白く開き初(そ)めきぬ　押尾　輝子
鶯の初音庭より聞こえきて看取り
疲れの癒えてゆくなり　掛川　友代
還暦も古希の節目も永らへて今年
迎へぬ喜寿のよろこび　鈴木　やす
春彼岸すぎて十日余けさもまだ庭
にうっすら霜の降り(お)ゐつ　石井　ユク
我が家の土蔵の屋根に巣を作り鳩
は何時しか人に慣れきぬ　宇井　ちい
松丘園のベッドの媼は涙ぐみ語り
かけくれうれしと言へり　池田　春江
汚水いま日本列島を流れ放題環境
浄化は誰がするらむ　萩原　信一
季(とき)くれば数ふる程の花咲かす冬を
耐へたる古木の梅は　永藤　滋
検診のその子を抱く母親ら皆一様
にカバンを背負ふ　向後　房
北風(きた)あれし桜並木の花なべて傷追
ひしまま空に静もる
選者　斎藤つね子